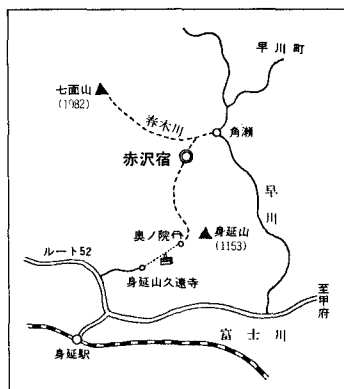


PSⅣ-1 観光からのまちづくり — 山梨県早川町・赤沢地区の例 —

山梨大学 正員 花岡利幸

1. 計画の背景と起点



南アルプス邑・早川町は山梨県南部に位置する南アルプスの麓の山間地に展開する町である。赤沢宿はこの町の中にある34集落のうちの一つの集落である。

甲府盆地から太平洋に注ぐ富士川に沿って国道52号線とJR身延線が通っている。日蓮宗の信徒は毎年80万人が逆に静岡県側からこの道を遡って身延山詣をする。さらに裏手には、春木川の谷を一つ隔てて標高1982mの信仰の山・七面山が聳え、身延山へ詣でた人のうち30万人はこの山にも詣でる。彼等は身延山頂から裏側の7kmの山道を3時間かけて下り春木川に出て、そこからまた半日かけて向い側の七面山をきわめるのである。

その途中、身延山の裏側の中腹に小さな台地があり、そこに30戸の集落が発達している。その集落・赤沢地区は日蓮聖人の鎌倉時代から日蓮信徒が休憩し、宿として使ってきた宿場町である。

近年、富士川沿いの52号線から早川沿いの県道が開かれ自動車が入るようになると信徒は自動車で迂回するコースをたどって七面山に登ようになり、バイパスされた赤沢宿を通過して行く信徒は1万人弱に激減してしまった。30戸、160人ほどの集落は、いまでは6軒の旅館が他の仕事と兼業されて、他の

家では集落外に職場を求めて昔の赤沢宿の活気はなくなってしまった。

しかし古い建築物群は赤沢宿の面影を残しており、また時折り白装束に身を固めた信者が打ち鳴らすうちわ太鼓の音は、静寂を破って周囲の落着いた雰囲気と聖地の雰囲気をはき立たせている。

ここに最近、赤沢出身の若者がUターンして来て、ふるさと赤沢を蘇らせようと頑張っている。その若者のグループが赤沢青年同志会である。16人のメンバーから成るこの同志会は、昭和55年に発足して今日までいろいろな活動をしているが、以下はその計画と実践の第一段階の記録である。

2. 構想と3つの作業プロジェクト

赤沢の昔の宿場景観を生かし、街並保存をするなかで時間をかけて宿泊客をこの集落に呼び戻すことを考えていく。小じんまりとした集落を一つの家とみたり、身延山と七面山を裏庭とみたり、自動車の接近を考えた玄関を然るべく計画する構想が、討論の結果、次のテーマに従ってまとまった。

テーマ1／周辺環境を配慮した集落の器（うつわ）

の整備。建物、歩道、樹木、その他景観を構成する種々の要素の整え方、素材の選択、配列など

テーマ2／経営の方法。信仰とやすらぎの里。赤沢の宿、写経の里、墨衣の読経、茶の湯、硯島焼きの援用、食べ物の開発、客の接遇法など

テーマ3／家風づくり。集落の住民のゆるい規律またはルールの形成

これらソフト・ハードの環境整備をひっくるめて景観計画と呼ぶことにしたが、これは、ここの精神的風土を強調するためである。

構想をまとめた研究会で、これを実現していくため、3つのプロジェクト・チームが結成され、具体化の作業が始まった。

① ふるさと通信班

人のつながりを大切にするため、前々から懸案の

季刊紙、ふるさと通信を年4回発行する計画である。このふるさと通信班が青年同志会の情報収集・企画・調整の役割、また町行政や商工会のパイプ役・その他赤沢区会や婦人会との連絡・協力の役割も担当する。

② 石畳班

赤沢の宿を身延山から七面山へ通ずる歩道がある。これを石畳の歩道にしようとする計画で、周囲の旅館の風景とマッチした集落景観づくりを街づくり計画の中心核に据えた。

石畳計画の対象道路は、宿中を通る歩道でその全長は約900mである。これを石畳歩道と呼ぶ。

赤沢区会では4年前より町行政がこの部分の舗装工事を計画しており、この工事予算がついて昭和58年度にも工事着工がなされる手はずになっていた。そこに石畳計画がもち上がったのである。まず、物的計画の策定、次に実施には多額の予算が必要であり、舗装工事の発展計画として町行政の支援を得ること、そしてこの計画を区会に理解してもらい計画変更を了承してもらうことにした。

③ 植樹班

集落景観を形成する計画で、石畳計画に続き重要な集落を樹木と花で埋める植樹班の担当とする。

赤沢の宿にはシダレ桜やカエデがよく似合うとの意見で、集落にはシダレ桜を、追分線へはイロハカエデを植えていく。

苗木の工面については、七面山別当より2年間に200本（3年生）を寄贈してもらうことが決まり、石畳計画との関連を保ちつつ実行する。植樹は同志会と年寄りの協同作業で行なう。

なお苗木の工面についてはさらに、県・町・商工会当地出身者に働きかけていくこととする。

3. 構想の発展と「千灯祭」

昭和59年4月から赤沢部落の再生活動は計画の具体化へ向けての数かずであった。

① 4月1日、シダレ桜の植樹

② 4月30日、石畳20mの完成

3月に石畳計画として役場に上げていた町道の計画に、試みとして20m分の予算がつき工事にいったもの

石畳は想像以上に立派なものができることが確かめられ、住民の関心は一段と盛り上った。朝日新聞ではこの経過を追いながら記事にしていた。5月に入って山梨放送テレビ、NHKテレビなどでも放映され、県下で赤沢の活動が注目されることとなった。（新しい計画）

新年度の計画として「観光客の誘致」がもち上がった。そのために従来からの8月14日の盆踊り大会を発展させ、約1000個の提灯を飾る大々的な「お祭り」をやろうとの計画である。4月2日の例会においてはほぼこの方向に決った。6月には区の役員会に祭りの企画を説明、協力を要請、承諾の返事を得て、名称も「千灯祭」に決定。ポスターの原案、報道機関へのアピール、パンフレットの内容などの打合せが進む。7月8日、区の役員会は提灯のための道草刈りを実施。区長名で寄付を募ることが役員会で決まる。ふるさと通信が大いに役立った。

（お祭り広場）

赤沢は小台地上にある部落だから広場はない。（望月利雄氏）は部落の中心部にみんなの広場を作りたいと思っていた。青年同志会がやる祭りに合わせて広場を整備しようと決心した彼は、6月に入って妙福寺の上人と工法・面積・予算など細かい話をし、以下のような方法で広場の実現にこぎつけた。

- ・妙福寺の裏に在る、部落民の畑を広場として寺へ提供すること（5軒の畑に一部妙福寺の土地を含め計600坪、広場として300坪）
- ・工事は寺が行なうこと（地元の工事請負2社の工事費は、ある時払いの催促なし）
- ・管理上の許可はあるが、広場を赤沢の住民が自由に使用してよいこと

以上のような経過と状況の中で“ふるさとに活力を”から“赤沢のまちづくり”へ、そして“赤沢に生産の場を”というふうに、青年同志会の目標が発展した。この過程は、地域に対峙した住民の危機感と合意形成およびそれに対する政策（計画）が段階的に変化していくことを示しており、そのときどきの危機感に裏打ちされた合意形成（目標設定）のみが有効で、計画の実現に寄与するものであることを示している。